第2期

ラオスにおける開発事業

ラオスは、インドシナ半島の最奥にある内陸国で、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーおよび中国と国境を接し、南北1,000キロに伸びる細長い国です。

《現在のラオス事情》(2002. 10 現在)

●ラオス人民民主共和国

1．面積：24万km²
2．人口：538万人（2001年）
3．首都：ビエンチャン
4．人種：ラオ人（60%）、その他、ミヤオ人、ヤオ人、ヌン人などの少数民族
5．言語：ラオス語
6．宗教：仏教
7．政体：人民民主共和制
8．主要産業：農業、林業、木材加工および水力発電
9．GDP（国内総生産）：1,813百万ドル（2001年）
10．一人当たりGDP：329ドル（2001年）
11．主要援助国：(2000年)（1）日本（2）ドイツ（3）スウェーデン（4）フランス（5）オーストラリア
12．在留邦人数：406人(2002年10月現在)
13．在日ラオス人数：1,352人（1999年3月現在の外国人登録）

《当時のラオス事情》

○ラオス王国

1．人口：192万人（1963年推計）
2．首都：ビエンチャン
　王都：ルアンプラバン

カンバイ農場入口の道路

3．政体：立憲君主制
4．主要援助国：（1965年）アメリカ

〔1〕事業の目的

1．機械力の導入による管理作業の近代化
2．灌漑による養蚕年中飼育の実現
3．施肥、消毒の徹底による収桑量の安定化
4．蚕室の大型化による量産飼育の実現
5．日本種（乾季）による収繭量の増大

〔2〕事業の概要

〈1970年度事業内容〉

1．養蚕

〈1970年５月27日より６月18日まで〉

- 日本種、在来種、交雑種の３種類の試験飼育を３期間に分けて実施。
- 試験飼育の段階のため、事業として大量飼育をするに至らず。

2．森林伐採

- 8 ha（80,000㎡）の森林の伐採と開墾。

3．養蚕技術指導員の派遣

- 養蚕技術派遣員として青木丈幸、今井収両名をラオスへ派遣。

ラオス到着の翌日、日本から持参したコンフリーの植え付けを行う
（農場にて、1970年２月22日）

〈1971年度事業内容〉

1．桑園造成（13ha）

- 新桑園1.5haにケオ種を植え付ける。
- 4 ha分13,000本の桑苗を育てる。
  ラオス避難民に桑苗2,000本を提供。

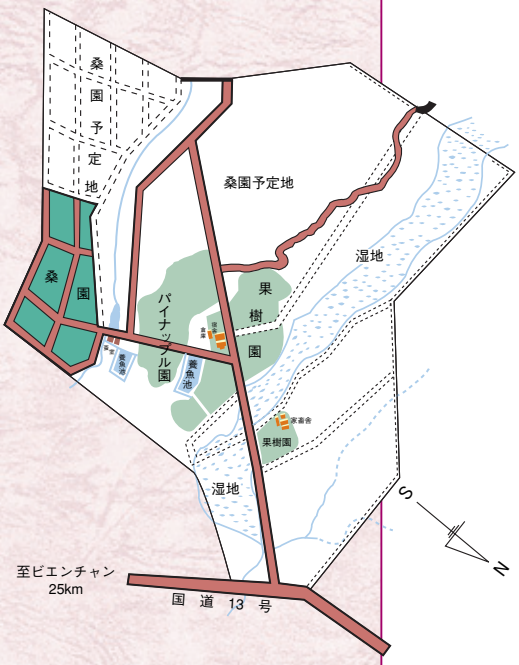
2．養蚕

- 日本種３箱の飼育を２回実施、収繭量63kg
- 日本種×在来種３箱の飼育を実施、収繭量55kg

カンバイ農場における桑苗作り

建築された蚕室と給水塔
（1972年）

レイタク・カンバイ農場の見取図（約100ha）



〈1972年度事業内容〉

1．桑園　3 ha分7,500本の桑苗を植える。

2．養蚕　飼育回数　8 回

　　収繭量　400kg

3．建築計画

- 蚕室、堆肥舎、消毒用プール、給水塔の建築

〈1973年事業内容〉

1．園芸技術者の派遣

- 清水芳洋が青年海外協力隊園芸担当派遣員としてラオスへ着任する。

〈1974年事業内容〉

1．畜産専門家の派遣

- 山口明が現地へ派遣される。

2．養蚕　収繭量　300～500kg

3．「レイタク・カンバイ模範農場計画案」「ラオス王国養蚕開発計画案」の構想

〈1975年事業内容〉

1．桑園　5 haの桑園造成、3 haに桑苗の植付け実施。

2．養蚕　飼育回数　7 回

　　収繭量　611kg

3．製糸技術派遣員の研修

①　青木丈幸が千葉県繭検定所や恵南産業株式会社において製糸技術研修を行う。

②　松本哲洋が海外子女教育振興財団よりビエンチャン日本人学校の教諭を委嘱され赴任する。

〈1976年事業内容〉

1．事業の撤収

①　派遣員の帰国

②　すべての施設や資材を現地に引き渡す。

〔3〕事業の経過

1）レイタク・カンバイ農場設立までの経過

麗澤大学中国語学科教授・奥平定世氏は、中国研究者として中国と東南アジアの言語と民族に関する研究のために、たびたび東南アジア各地を訪ね、その中でも特にラオスに興味を持ちました。そして1959年からラオスでの調査を開始、ラオスのビエンチャン市内で病院を開業されていた小川蔵太医師との出会いから、ビエンチャン商工会議所会頭のカンバイ・ピラパンデ氏を紹介されました。カンバイ氏はビエンチャン市内で農業機械の代理店や製材所、農場などを手広く経営されており、ラオスの経済的独立を図るためには、これらの農場経営について日本の技術協力が必要なことを奥平氏に強く訴えました。

蚕室の内部。現地の蚕具を使っての飼育が行われた

奥平氏はそれに応えるべく、帰国後、ラオスにおける開発援助の同志を募りました。それは1964年、当協会の設立以前のことでした。そして、奥平氏の献身的な働きかけにより、ビエンチャン市内から北西25キロの地に、レイタク・カンバイ農場が設立されました。

2）レイタク・カンバイ農場設立後の経過

1964年６月に、当時の財団法人道徳科学研究所の廣池千太郎次長、同研究所の長谷虎治評議員が現地を視察し、同年11月、学校法人廣池学園から池田信輔氏・杉本滋氏の両名がレイタク・カンバイ農場に派遣されました。当時、農場の総面積は約100ha、二筋の湿地帯を挟む丘陵地で、この湿地帯は近辺では珍しく、ラオスの年間の半分を占める乾季にも絶えず水が流れていました。開拓面積は13haで、そこにはパイナップルを主にしてココヤシ、マンゴー、ライチなどの熱帯果樹が植えられていました。近

造園計画の立案には現場を歩くことも重要

ジャングルの開墾

繭を座繰りする現地の女性

桑園の造成をする今井収氏

くの村落までは約３km離れたジャングルの側に位置し、農場内には電気・ガス・水道・電話などのいわゆるライフラインといわれるものは全くありませんでした。

そのような環境の中で、池田氏と杉本氏は、1968年までの４年間、約10名の現地スタッフとともに、農場開拓の業務を行いました。まず、湿地帯の一部に排水を行って野菜畑を造成、各種野菜の栽培を試みました。中でも濃紫色の日本ナスは市場でも珍しがられ、栽培・販売ともに成功しました。農場内の２つの池では、鯉、雷魚、鯰などの養殖も行いました。

また、手付かずの丘陵地を開拓し、５haの桑園を造成しました。これにともない、蚕室二棟を建築し、養蚕事業に着手しました。蚕室の建築にあたり、害虫の侵入を防ぐために周囲に水溝を巡らしたり、網を巡らすなど、さまざまな工夫を取り入れ、従来の蚕室を大幅に改善しました。

もともとラオスでは、古くから養蚕業が行われておりましたが、蚕の品種・品質ともに貧弱であり、また製糸作業も座繰りを使用した手作業が行われていました。この養蚕業の近代化がカンバイ氏の要望課題の一つでもありました。また、現地の人々がより豊かな生活を送れることを目的として、将来的にこの養蚕業・製糸業を海外への輸出事業として発展できるよう、当開発事業の主軸として力を入れていくようになりました。

池田氏と杉本氏の派遣以降も、当協会の設立にともない、廣池学園、麗澤高校から若い人材がラオスへと派遣されました。1969年には、淡島成高氏が現地責任者としてレイタク・カンバイ農場に派遣されました。また同年、千葉県蚕業試験農場においては今井収氏、青木丈幸氏に対する養蚕業の研修が始まり、研修終了後、1970年に両氏は海外開発要員とし

て現地へ派遣されました。そして、1973年に清水芳洋氏が、千葉県の農業試験場での研修終了後、園芸担当員として現地に派遣されました。その後、1974年に畜産専門家として山口明氏が現地へ派遣されました。このように、レイタク・カンバイ農場での開発事業の活動体制が整うに従い、池田氏と杉本氏が着手した養蚕事業はさらに拡大されました。また、新しい蚕室の建設、堆肥舎、消毒用プール、給水塔などが建設され、農場内の設備も整いました。

栽桑事業は今井氏が担当し、当初13haある農場で１haしかなかった桑畑を４haまでに拡大し、そこで桑苗の栽培が行われました。１haあたりの桑畑には約2,500本の桑苗が植えられ、収桑量は約10ｔでした。農場が湿地帯に位置していたこともあり、適度な水分が確保できたことと、腐葉土が多くあったため、桑苗栽培の事業は成功しました。

桑苗床造りをする今井氏

養蚕事業は青木氏が担当し、蚕種の品質改良が行われました。１箱に約18,000頭の蚕を飼育、１箱から約20kgの収繭量を目標とし、ラオスの在来種、日本種、２種の交配種など、さまざまな蚕種を使用した試験的な養蚕事業が行われました。養蚕事業の成功にともない、乾繭（かんけん）技術・製糸技術を学ぶために、青木氏は日本国内でさまざまな技術研修を受け、ラオスへ日本の優れた技術を導入しました。

園芸事業は、清水氏を中心に行われました。ラオスの農業人口は全人口の85％で、食糧自給率は50％という状態でした。残りの50％はタイなどからの輸入品でまかなっていました。乾季と雨季という気候から、野菜を栽培できる時期は年間の約半分。品質もタイのものに劣っていました。これらの問題を解決するために、米をはじめとしてさまざまな野菜の試験栽培が行われました。また、山口氏は養蚕事業一般から、堆肥作り、土地の改良などの事業にあたりました。

湿地を利用した桑苗床
（乾季に育苗し雨季に植え付ける）

3）ラオスにおける開発事業の中止

当時のラオスは王制で、アメリカから援助を受ける自由主義社会でした。しかし、1972年ころからパテト・ラオ（ラオス愛国戦線）の勢力が強くなり、1975年にラオスの王制が廃止、人民民主共和国が樹立されました。自由主義社会から社会主義社会へと変わり、ラオス政府が西側諸国の援助を拒否し、経済にも勢いがなくなり、治安も不安定になっていきました。レイタク・カンバイ農場の現地スタッフの中からもラオス政府に徴兵される者がありました。また、ガソリン、食料品、日用品などが不足し、外出禁止令が発令されるなど、現地での活動が制限されることになりました。こうしたラオス国内の情勢悪化にともない、ラオス国内の状況を当協会に説明するため、派遣員が相次いで帰国。1976年に開催された当協会の理事会・評議員会で、ラオス養蚕開発事業の完全撤収が決定されました。レイタク・カンバイ農場の管理、運営をすべてカンバイ氏に引き渡し、事業撤収業務を終了した青木氏が1977年に帰国、ラオス養蚕開発事業は中止されました。

当時のラオス切手

〔4〕事業の成果

やむなく事業を中止するまでの間、淡島氏をはじめ、今井氏、青木氏、清水氏、山口氏は、ラオス国の発展とラオスの人々の幸福を願い、20代の数年間をラオス国での活動に献身、森林伐採、桑園の造園、養蚕、園芸、畜産など、さまざまな農業開発を行いました。ライフラインのない不便な現地で、すべての作業が派遣員、現地スタッフの肉体労働によって行われました。現地の若いスタッフとともに、作業を行っていく過程には、言葉、習慣、文化の違いから多くの障害がありました。しかし、互いに協力し合って困苦・欠乏を乗り越えた彼らの間には、30年経った現在も薄れることのない強い絆

があることでしょう。

ラオスでの事業は、その事業の撤退後、ラオス国内において、これらの活動の成果が目に見えて引き継がれたとは言い難いものでした。しかし、農場を開設する、ダムを建設する等、明らかな成果の残るものだけが、開発援助なのでしょうか。財団の設立にあたり、なぜラオスに農場を開設するのかという問いに、奥平氏は次のように答えています。

「あそこに農場を開くというのは、単に農業をやってどうしよう、というような目的ではないのです。それは、われわれ日本人が本当の愛情をもって、発展途上国家であるラオスの人心を開発しなければいけないというような意味合いから、ラオス問題を考えておったのです。（中略）日本から若い人が行ってラオスを研究する。そしてラオス人と親しくなっていくと同時に、日本を正しく理解させ、そして彼らを精神的にも物質的にも豊かにしてあげる。こういうふうにしていくことが、ラオスの政治、経済の面においてもよい結果が望めるのではないかと、私は考えておるわけです。これは、日本のため、またアジアのため、さらに世界人類のためであろうと思います」

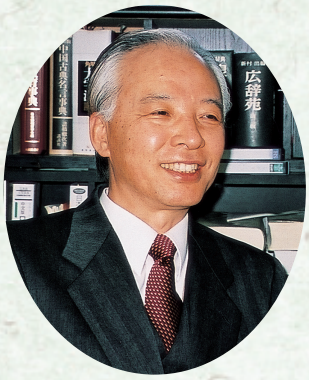
21世紀を迎えた今、ODA（政府開発援助）やNGO（非政府組織）などによる発展途上国に対する援助の見直しがなされています。建設事業を中心としたハード面の援助から、人材育成などのソフト面の援助へと、その形態が少しずつ移行されてきています。しかし、われわれは30年前に、すでにこのようなソフト面の援助を目標とし、多くの若い人材を現地に派遣してきました。そして、現地で働く青年たちのほとばしる至誠と情熱こそ、ラオスのこれからの大いなる推進力であり、これこそラオスでの開発事業が現地に残した成果だったと言えるでしょう。「ラオスの土になる」と発展途上国での仕事に情熱を傾けた青年たち、彼らの強い熱意に賛同し心のこもった支援をくださった有志の皆さま、純真で素朴な現地の人々、さまざまな場面で形成されていったネットワークは、財団の活動のあらゆる基盤となったのではないでしょうか。

インタビュー

ラオス産業の自立をめざして

淡島成高氏

聞き手▼編集委員



ラオス駐在責任者として5年間ラオスに滞在された淡島成高氏（麗澤大学外国語学部教授）に、当時のお話をうかがいました。現地駐在員ならではの、貴重な体験談をお聞きしました。

■ 奥平教授の熱意に動かされて

――淡島さんがラオス駐在にいたるきっかけは、どんなことだったのでしょうか。

淡島　1966年3月に麗澤大学中国語学科を卒業、貿易商社に入社してそろそろ3年になろうとしていたころ、奥平定世教授（故人、財団設立時の常務理事）から「淡島、ラオスへ行ってみないか」との話があったのがきっかけでした。中国語を勉強したからには中国語を使って仕事がしたい、その念願がかなって日中貿易の商社に入社し、入社1年目から会社代表で中国に派遣されるなど、重要な仕事を任され、得意絶頂、無我夢中で2度、3度と中国出張が続いていたころでした。

一方、中国は文化大革命の真っ只中で、対外的に門戸を閉ざしていたころですから、精神的には重苦しく、出張しても緊張の連続でした。また、現地では、つい昨日言葉を交わした大手ダミー商社の社員がスパイ容疑で捕まるなどといったニュースがあったころでした。

もっとも、そうしたことだけが退社を考える直接の要因ではありませんでしたが、文革の嵐が日本国内の業界にまで影響し、仕事以外に何々に反対、何々に抗議といった動員指令が会社や個人にかかってくるなど、これも仕事なのかと少々疑問を感じていたころ、ラオスの話が飛び込んできたのです。

――発展途上国で働くことに抵抗はなかったのですか。

淡島　麗澤海外開発協会の設立の原動力は、奥平教授の熱意そのものであったと思います。学生時代から事あるごとにラオスの話を聞かされていたせいか、比較的抵抗なく「行こ

うか」という気になりました。でも当時はまだ財団の設立も見ていないし、私の現地での仕事内容も明確なものでもありませんでした。また、学園内でも新しい仕事ですから不安を表明される方もあり、いくらか躊躇する気持ちもありましたが、発展途上国での仕事に情熱を傾けるのも夢があっていいのではないかと、手探り状態ながら1969年８月、現地に向けて出発しました。

手元に1968年８月増刊号の『れいろう』があります。「特集・海外に伸びる」というタイトルがついて、平塚益徳氏（故人、元国立教育研究所所長）がラオスを訪問されたこと、麗澤海外開発協会の設立準備の状況などが記されています。その記事の中に大きく取り上げられていますが、私たちが派遣される前に、池田信輔氏（その後、日本政府OTCA養蚕専門家としてラオスに赴任。現在はシニア・ボランティアとしてタイ王国にて活躍）と杉本滋氏（麗澤高校定時制卒業、麗高16期）のレイタク・カンバイ農場での想像を絶する苦労があってこそ、財団設立に大きく動いたのではないかと思います。また、それを気長に物心両面でバックアップし支えてこられた内田武男氏（故人、財団設立時の監事）などの心のこもった支援のお気持ちが、後に派遣された我々にも伝わってきたのではないかと思っています。

カンバイ・ピラパンデ氏（左）と
奥平定世氏（右）

■ のどかな時の流れの中で

――派遣された当時、ラオスの様子、印象はどうでしたか。

淡島　ラオスは現在、ラオス人民民主共和国（1974年～）という国名になっていますが、当時はラオス王国という名称で、ワッタナ国王を戴き、ラオス国民もこぞって尊敬の念を抱いていました。また、何よりも敬虔な仏教国（小乗仏教）で、争いごとを好まない柔和な国民性を持っていました。私

トラクターに乗る

の在任中もクーデター騒ぎがありましたが、市内でドンパチやっているわけでもないのに、一般市民の反応がどうしてこんなに震え上がるほどなのか訝(いぶか)しく感じたことがあるほどでした。しかし、内外の情勢はのどかな農業国をそのままにさせておかず、パテト・ラオ（ラオス愛国戦線）が活発に動き出すなど、隣国のベトナム戦争に大きく左右させられました。当初はアメリカの人的・物的支援に頼るところが大きく、経済的にもいくらか潤っていたのでしょうが、戦争が拡大されるに従って北部からの難民が増えてきたり、夜間外出禁止令が出るなどの変化が出てきました。もっとも、市内では日本の新聞で報道されるような緊迫した場面は全くと言っていいほどなく、あとで日本の新聞を見て、こんなことがあったのかと知るほどでした。

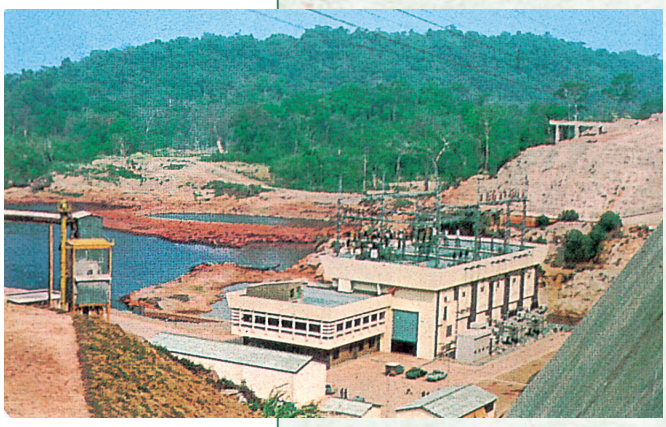
――ラオスの人々の暮らしはどうでしたか。

淡島　ラオスには、これといった産業がありませんでした。タイ、カンボジア、ベトナム、中国、ミャンマーに囲まれた日本の本州ほどの内陸国で、国全体の70%が山岳地帯であり、１年が雨季と乾季にはっきり分かれ、雨季にはよく水害に見舞われていました。平野部では水稲が、山間部では焼き畑による陸稲が主でしたが、実にのんびりした国民性でした。当時の農業援助を物語るものとして、ある国が稲作の技術援助をしたところ、例年より２倍の収穫があり大いにその成果に満足したのですが、次の年に行ってみると、去年は倍取れたから今年は休んでいたという話があったほどです。また、日本も専門家をはじめ海外青年協力隊を数十名派遣するなど、世界で最も多くラオスに派遣していて、農業、産業技術、電信電話、医療、スポーツ、日本語など、あらゆる分野で専門技術を持った日本の若い人たちが活躍していました。我々は、政府援助事業として派遣された彼らとは立場が違いましたが、彼らとの交流を通して、お互いにラオスのために何か力になろうと刺激し合ったように思います。

私が赴任して１年目ぐらいに、市内に信号が付きました。そのころ、ほんの少しでも違反する者はいないかと、四六時中お巡りさんが見張っていたのが思い出されます。市内に初めて４、５階建てのホテルができたとき、エレベーターを見

るために、弁当持ちで見学に来た人がいたということも聞きました。テレビはタイの放送を傍受していて、電話も主だったところにしかなく、直接行ったほうが早いという状況でした。日本からは時々電話連絡をするようにと指示がありましたが、どこで電話を借りようかと苦労したものです。鉄道はありませんから、乗り合いタクシーか、市内は人力三輪車のサムローといわれるものが足代わりでした。しかし、こうした環境が不便で苦痛だったという思い出はみじんもなく、のんびりとのどかに時が流れていったように思います。

人力三輪車のサムロー



ナムグム・ダム

日本人の駐在者も、大使館関係者、日本政府OTCA専門家、青年海外協力隊をはじめ、民間ではナムグム・ダム建設の関係で間組、日本工営、それに商社は三井物産と東洋綿花の２社だけで、またアメリカ軍関係に携わっていた何人かでした。本当に在留邦人全員と親しく知り合いになれるほどの少人数で、日本人会も中華料理屋さんの一室で一堂に会せるほどでした。その中でも、レイタクは５、６人いましたから、民間の一単位としては大所帯でした。

■ レイタク・カンバイ農場での生活

――当時のレイタク・カンバイ農場の様子を教えてください。

淡島　首都のビエンチャン市内から北方25キロ地点に農場がありました。市内を外れると、すぐに舗装道路は途切れて赤土の道が続き、乾季はもうもうと土煙りをあげ、雨季は泥道にハンドルを取られ取られの道のりでした。農場の全面積は100haありましたが、私が行った当初は、農園らしいとこ

ワッタナ国王に絹糸を献上するカンバイ氏の子どもたち（タッルアン祭）

養蚕について説明するカンバイ氏（タッルアン祭）

ろは桑畑、パイナップル畑、養魚池など、一部の地域だけでした。桑畑の近くには10坪ほどの蚕室があり、農場の中央部に２階建ての住居（１階は倉庫兼稚蚕飼育室）がありました。２階には水洗用便器のあるトイレがありましたが、電気、水道はありません。入り口部分に屋根からの雨水をためる水槽がありましたので、その水を利用したり、外の井戸からの水を運びあげて使っていました。

裏手には労働者用の住居があり、本格的な農場生活が始まったころからは、炊事・洗濯などを引き受けてくれる家族が住み始めました。夜の明かりはアルコール・ランプで、日ごろの手入れは大変でしたが、読み書きができる結構な明るさでした。風呂はもちろんありませんから、池のほとりで体を流していました。水辺でパチャパチャやっていると、３、４センチもあるヒルがひょろひょろやってくるのですが、それをよけながら水をかぶっていました。また、乾季の冷えるころなどは少々辛いアブナム（水浴び）でした。

南国の風景に、水牛が子供を背に乗せてゆったりと歩く絵や写真を見かけますが、この水牛には手を焼いたり驚かされたりしました。農家ではたいてい水牛を１、２頭飼っているのですが、雨季の稲が植わっている時はしっかりと繋がれているのですが、取り入れの終わった乾季には放し飼いになります。農場には周囲に柵が施してあるのですが、夜中にはどこからか侵入し、首に付けたカネをカランカランと鳴らしながら入ってきて、桑の葉を食べたり、桑の木に体をこすりつけたり、やりたい放題されるわけです。ある時、あまりにも頭に来たので、水牛の尻をピストルで打って驚かしてやろうと思って構えたところ、幸いにも撃鉄が壊れていて発射しませんでした。もし、それが元で水牛が死んでもしていたら、村中の恨みを買って、どんな事件に発展していったか知れません。海外での生活は、人間とはもちろんですが、動物とも仲良くしなければいけないことを痛感しました。なお、ピストルはカンバイ氏が何かあればと貸してくれたものですが、

翌朝、あわてて返しにいきました。

また、車に乗っていて道路で水牛にぶつかったことがありますが、この時は向こうが一回転したものの、こちらのラジエーターがやられてしまいました。ビエンチャン市内から農場までの25キロは、水牛が飛び出してきたり、鶏が飛び込んできたりして、ラオスならではの光景でした。

気持ちよさそうに水浴びをする水牛

■ 地元の名士カンバイ氏

――現地での仕事にはすぐに慣れましたか。

淡島　当初は現地の人が一人いて、カンバイ氏の指示に従って農場を管理していました。私もその人と一緒に、見よう見まねで養蚕を始めました。何しろ蚕については、千葉県の蚕業試験場で見たことはありましたが、自分で飼ってみるのは初めてのことでした。蚕が何回か脱皮をしたり眠りを繰り返すことなど知らないものですから、いくら桑をやっても食べないので不安になったこともありました。また、桑畑の管理をしていて、茅の始末に困って火をつけたところ、どんどん燃え出して桑の木を台なしにしたばかりか、隣家のさとうきび畑にまで損害を与えてしまい、カンバイ氏を立腹させてしまったこともありました。

―― 共同事業者のカンバイ氏は、どんな方だったのですか。

淡島　カンバイ氏は、ビエンチャン商工会議所会頭という肩書きを持っていました。どのような事業が主であったかははっきりしませんが、商品の輸出入業務をしたり、製材工場、タイヤの再生工場が主業務だったでしょうか、小さな宿泊施設も持っていたようです。もちろん、我々の繭が取れた後は、軒先でおかみさんや女性陣総出による糸ひきも行われていました。父上の逝去後、何年かして本葬がラオスの大僧正の読経で執り行われましたが、式にはプーマ首相も参列されたので、ビエンチャンの名士だなあと実感しました。また、子供の結婚式では、自宅の庭にステージを設けるなど派手な演出もあり、

カンバイ氏夫妻

高床式家屋の中での機織り

4条の小型製糸機を使っての製糸作業
（1976年）

実業家ぶりをうかがわせましたが、そんな場にはいつも大臣や将軍、警察署長といった来賓が顔を見せていました。

毎年秋にはタッルアン寺の境内でラオス万博のような催しがあり、日本をはじめ各国が自国を紹介したりするパビリオンができていましたが、その中にはカンバイ氏のブースもあって、タイヤ工場や我々の養蚕・製糸コーナーも設けられていました。そして、ある年はワッタナ国王自らが参観に来てくださり一同大いに感激しましたが、これもカンバイ氏の実力があってこその出来事でした。

――淡島さんに続いて千葉県の蚕業試験場で研修を積んだ青木丈幸氏（現廣池学園職員）と今井収氏（同）の二人が派遣されましたが、どんな様子でしたか。

淡島　彼ら二人は、実に精力的に現地の人たちとも溶け込み、終始前向きに仕事に取り組んでくれました。トラクターや蚕具などが揃ったこともあり、桑の苗木作りから桑園の拡張、積極的な飼育へと手掛けていきました。1972年には、１万１千USドル（330万円）をかけた、160坪の蚕室と堆肥舎、繭乾燥装置、井戸などが完成しました。

当初は私も独身で一人だけでしたので、市内のカンバイ氏宅の１室で生活し、毎日農場まで通っていましたが、青木・今井両氏が来てからは、農場での共同生活が始まりました。私は1971年に一時帰国し、結婚して再赴任しましたので、それ以降はビエンチャン市内に居を構えました。市内でいくつかの用事を済ませて農場に顔を出すわけですが、農場の現場の仕事とマネージメントとでは若干のギャップがあって、共に汗を流す現場指揮官になり切れませんでした。現地の労働者と接触している他のスタッフの立場から見れば、歯がゆく感じられたことも多かったかも知れません。

また、1973年には、蔬菜技術を持った清水芳洋氏（後に青年海外協力隊に転出。現タイ王国派遣専門家）が派遣されてきました。また、1974年には畜産専門の山口明氏（現モラロジー研究所職員）が赴任してきて、養蚕、蔬菜、畜産と農場運営のスタッフが揃ったわけですが、私自身の農業面での力量不足もあって、十分に実力を発揮してもらうだけの受け皿作りができませんでした。

一方、メインである養蚕については、繭の収穫量が今までの年間50～100キロそこそこだったのが、年数回の飼育で300キロ、500キロと順調に伸びていきました。

■ 情熱を持って取り組んだ事業

――現地スタッフも充実し、ますます事業の発展が期待されたのではないでしょうか。

淡島　ええ。このころ「レイタク・カンバイ模範農場計画案」や「ラオス王国養蚕開発計画案」をたびたび作成しています。現農場を充実させ、それを核に一大養蚕団地を広げていこうという構想です。麗澤海外開発協会とラオス政府とでラオス蚕業開発委員会を組織し、その下に蚕業協同組合、養蚕普及所を設け、６年後には年間560箱飼育、14トンの集繭量をめざすという壮大な構想でした。この背景には、北部からの難民が増えてきたことや、日本政府も彼らの入植地を造成援助するなどの積極姿勢を見せていたこともありました。また、こうした案が、麗澤海外開発協会の事業に理解を示してくださっていた農林省の桜井卯之助氏（農林省蚕糸園芸局改良課課長補佐）を通じて農林省農蚕園芸局長に提出され、海外経済協力基金融資の要望書も出されました。

しかし、その後1974年のラオス王国から連合政権への政変以降、諸々の事情が重なって、必ずしも我々に追い風が吹きませんでした。今、手元に当時書いた手書きの計画書が何部か残っていますが、よくここまで綿密に書き上げられたものと、我ながら感心している次第です。ただ、結果的には実現しなかったわけですから、今にして思えば「カンバイ農場にのみ集中し、足元をもっと固めるべきだった」「政府援助に頼ろうとすべきではなかった」などの反省もありますが、当時としては最善の策を模索した結果だと思っています。

――そうですね。皆さんの熱意、意気込みは現地の方、日本から支援してくださった皆さんに、精いっぱい伝わっていたと思います。当時の皆さんのあふれんばかりの情熱は、様子を知らない私にも十分に伝わりますから。

淡島　そうですか。当時、蚕室建築にあたって地鎮祭を執

竹で編んだ現地式の飼育カゴ

り行いましたが、その時、以下のような「祝詞」を読んでいます。

「財団法人麗澤海外開発協会が世界の人類の安心・平和・幸福を願って、この地ラオスに一粒の種が蒔かれて既に数年、その念願は徐々に実りつつあります。今、ここにラオスの平和と養蚕業の発展を祈りつつ、蚕室ならびに付属施設の建設に着手せんと、建築家・細井和夫氏の協力の下、この地カンバイ農場にその一石を投じようとしています。麗澤の精神をいささかなりとも備えた我々一同は、前所長・廣池千英先生、現所長・廣池千太郎先生の真に人類の安心・平和・幸福を願われる、その精神を体得しお役に立ちたいと念願しています。この建築工事が安全にとどこおりなく行われ、完成の暁には我々の事業が益々発展していくことを祈念しています。

1972年２月26日　財団法人麗澤海外開発協会 ラオス駐在責任者　淡島成高」

地鎮祭で祝詞を奏上する淡島氏

今、これを読み返してみると、「祝詞」の体をなしていないような気もしますが、よしやるぞといった当時の意気込みが思い起こされます。竣工披露には大使館、農業専門家の方々も招待し、これを機に麗澤の事業に理解を深めていただいたように思います。

■ 苦労の中で見いだした温かい出会い

――現地で苦労されたことはありますか。

淡島　運営上困難に感じたり大変だったことは尽きませんでしたが、今思い起こせば貴重な体験だったと、プラス面のほうが多かったように思います。ただ、当初、金銭面でのやりくりには苦労しました。財団設立以前は送金方法がなく、何度か樋口幸夫氏（事務管理室経理担当、元廣池学園経理部長）と日銀に相談に行ったりしました。我々が一時帰国した時に現金を持ってきたり、日本から訪ねてこられる学園関係者にできるだけ置いていってもらうといった方法しかありませんでした。それでも足りないこともあったので、個人的に立て替えたり借入れしたりして、やり繰りしたこともありま

した。

――現地との共同運営という点で苦労したことがありますか。

淡島　カンバイ氏との金銭的な面での共同運営はかなり苦労しました。取り決めでは折半になっていましたが、両者が資金を出し合ってプールしたお金を使うというのであれば、その都度相談して出せばいいのですが、そうしたシステムもなかったため、農場運営のほとんどはレイタク・カンバイ農場から出し、ときどき繭の売り上げはカンバイ氏より入ってきていました。今から考えれば、両者の話し合いでもう少しうまく切り盛りすればよかったのでしょうが、当時としては現場で肥料がいる、ブルドーザーを入れたい、労働者が臨時で必要だといったタイムリーな仕事をこなしていくには仕方がなかったのかも知れません。労働者を常時数人使うようになっていましたが、１人に月給５千キップから８千キップ（10～16ドル）、家事を切り盛りしてくれる家族には７千キップ（14ドル）支払っていました。なお、我々の給料は当初100ドル～200ドル、途中からは140ドル～240ドル（～71年＝@360円、72年～＝@300円、73年＝@260円）に上げてもらいました。政府派遣の専門家や協力隊の人たちと比べると決して多くはありませんでしたが、みんな不満に感じることなく結構楽しくやっていました。それに本部サイドでも、ラオスにどれだけいつまで注ぎ込めばいいのか、といった空気もあったようですし、貴重な財源をから捻出してもらっていたわけですから、贅沢など言っておられませんでした。

――反対に、今でも忘れられない良い思い出はどんなことですか。

淡島　現地でのさまざまな人との出会いでしょうか。最初に１人で赴任した当初は、先ほど申し上げたようにカンバイ氏宅の１室で寝起きしていました。食事時になると「シマー（アワシマ）、キンカオ（食事）」と子供たちが呼びに来てくれ、家族の人たちと一緒に食事をしていました。お金持ちの家ですから、おいしいものもありましたが、どうしても手をつけられないものもあって、苦痛に感じることもありました。そのうち、気候に馴れないこともあってか、だんだん痩せていったので、日本人医師の勧めもあって、日本料理屋さんの

石油コンロを使っての昼食準備

本格的な飼育が始まる（1972年）

カンバイ氏の次男の結婚式でのバッシー

月極定食を食べるようになりました。家での毎日の食事は辞退しましたが、カンバイ氏家族の温かい気持ちは今も忘れることができません。誰かが来訪してくれば、必ず歓迎のバッシーというお祈りと会食をしていただいたし、お祝いごとがあるときなどは必ず招待していただきました。また、カンバイ氏自身は一見恐そうなおじさんでしたが、おかみさん共々、私たちを家族同様に扱ってくれたことが何よりうれしいことでした。

また、計画省課長としてウドム・ラタナヴォン氏（現・竹原茂麗澤大学教授）が日本留学から帰っていたので、よく役所へ訪ねて行きました。その後の政変もあり、彼の立場は微妙なものとなり、再度日本に来ることになりましたが、国の体制如何によっては、レイタクのその後の展開も違ったものになっていたかも知れません。しかし、財団設立以前から日本とラオスで何かとパイプ役を果たしてもらった彼とは、今日までご縁が続いています。

■ ラオス産業の開花を願って

――農場には日本からの来訪客も多かったのですか。

淡島　はい。実にいろんな方々の来訪を受けました。先の奥平教授と井田孝教授（当時の技術開発室責任者、現麗澤大学名誉教授）は年に２、３度来られ、田島政芳氏（当時の事務管理室責任者、現麗澤海外開発協会顧問）には絹織物や金糸業を営む京都のモラロジアンの方々と来訪していただきました。日本の農林省関係で、養蚕の専門家もたびたび訪ねてこられましたし、また、麗澤大学や東京農業大学の学生が頻繁にやってきました。数か月一緒に働いてくれた農大生や、間違って虫さされ薬で歯磨きをしてしまい、平気で「ラオスとはこんな所か」と変に感心していた農大生もいました。タイで財布を盗まれ、お寺の托鉢の食糧を頂いてラオスに転がり込んできた麗澤大学生など、市内から離れた土地の不便さを感じさせないにぎわいでした。

また、大使館の人たちとも親しくなり、よく農場に訪ねてこられたりしました。財団設立を勧めてくださったのは当時の下田吉人大使、レイタクの事業展開に理解を示してくださったのが谷盛規大使、山下和夫参事官でした。山下氏は後に皇太子殿下御成婚時の東宮侍従長を務められましたが、退任されて今度お食事でもとお誘いを受けた矢先、急逝されてしまいました。西山健彦参事官は後の欧亜局長、原島毅書記官は元の沖縄大使、今川幸夫書記官は初代ベトナム大使を務められるなど、錚々たる人たちがラオスに駐在されたようですが、惜しいことに、皆さんは1年か2年で他の任地へ赴かれ、民間レベルの事業に理解は示してもらっても、それを引き継いでもらえるところまでには至りませんでした。

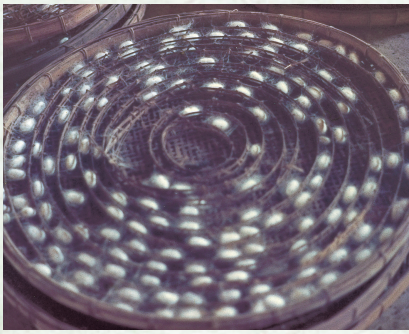
――最後に何か一言お願いします。

淡島　1969年から74年までに2度、一時帰国をさせてもらいましたが、ラオス養蚕開発に微力ながら足かけ5年携わることができました。この間、「物心両面から発展途上国の向上に尽力し、産業開発に寄与する」という開発協会の設立趣意にどこまで忠実に実行できたか、今改めて振り返って自問自答してみると、ああでもない、こうでもないと、反省材料が思い浮かんできます。

廣池千太郎会長からは、「慌てても結果がすぐに出るようなものではないんだから、長い目でじっくり取り組みなさい」と激励をいただき出発したものの、少し結果を急ぎすぎたかも知れません。高度な農業技術を持ち合わせた人が必ずしも開発事業にふさわしいとは限りませんが、我々には、技術に裏打ちされた戦略に少し欠けていたかも知れません。

我々の活動がラオスの産業開発への導火線となって華々しく開花する、というのは大きすぎる夢でしたが、池田氏から始まって、それに続いた何人かの情熱と麗澤の物心両面から支えてくださった精神がラオスのどこかに生きているとしたら、これ以上の喜びはありません。世界のニュースの中でもこれといったことがあまり報道されない小さな国ラオスですが、平和で、争いのない安定した国家になっていくことを願ってやみません。

日本の回転蔟（まぶし）



竹で編んだ現地の蔟

麗澤海外開発協会との出会い

――元ラオス王国開発協力のはじまり

竹原 茂
（旧名ウドム・ラタナヴォン）

私と麗澤海外開発協会との出会いは、1967年11月、ビエンチャン商工会議所会頭のカンバイ・ピラパンデ氏と道徳科学研究所（現モラロジー研究所）の廣池千太郎次長（当時）との対談の通訳がきっかけでした。当時の私は一橋大学経済学部３年生（発展途上国の経済開発専攻）でした。その前に私は、ラオス王国チャオ・ニット・ノーカム駐日大使と麗澤大学の奥平定世教授と六本木のラオス大使館でお会いし、廣池千太郎先生とカンバイ氏との対談の流れについて打ち合わせをしました。そのとき、麗澤大学の井田孝先生と淡島成高氏にも会いました。その後は毎月、廣池学園等で奥平先生や協会設立メンバーと会うようになりました。

1971年４月から、私は麗澤海外開発協会の設立準備のため、嘱託としてお世話になりました。主に「レイタク・カンバイ農場」事業計画資料等の翻訳や、ラオス政府関係者、廣池学園への訪問者に通訳をすることなどが業務でした。最も緊張したのは、同年５月24日の協会設立披露における廣池千太郎先生とチャオ・ニット・ノーカム駐日大使のご挨拶の通訳でした。このときの祝賀パーティーでは、日本の友人・柏原哲也氏のご協力で、在日タイ留学生とフィリピン留学生による民族舞踊が披露され、会の雰囲気が盛り上がりました。

その他、貴賓館におけるチャオ・ニット・ノーカム駐日大使ご夫妻の歓迎レセプションや、ラオス王国のフムパン・サイヤーシット経済計画大臣とチャオ・カムヒン駐日大使（元国王の弟）の友好訪問歓迎レセプションにも準備と通訳をしました。その場で大臣が「今、ラオス政府ではウドムさんのような人材が必要です。ぜひラオスへ戻ってほしい」とおっしゃったため、廣池千太郎先生をはじめ協会役員の皆様から「今、国家が君を必要としているときだ。ラオス帰ったほうがいいと思う」とのお言葉をいただきました。そして1972年11月、妻と子供を連れてラオスに帰国し、経済計画省に計画課長として入省しました。帰国した後も協会の嘱託のままでお手伝いをさせてもらいました。

1973年２月21日、ラオス王国政府とベトナム・中国・ソ連がバックアップしたラオス共産党との「ラオス和平協定」がビエンチャンで調印され、1974年４月に第３次連合政府が成立しました。そして同年10月６日、私は、日本の文部省の奨学生（第２回目）として一橋大学大学院経済学研究科修士課程に入学するために来日。廣池千太郎先生をはじめ協会役員の皆様のご理解を得て、廣池学園内の住宅に入れていただき、そこか

ら国立市の一橋大学に通いました。奨学金だけで5人家族を養えず、協会の仕事を手伝いながら一部の生活費を援助していただきました。

1975年12月2日ラオス共産党がラオス全土を制圧して王制を廃止し、ラオスは人民民主共和国（共産主義国）へと移行しました。その政変により、1976年3月、一橋大学大学院経済学研究科修士課程を修了した私は、ラオスへの帰国を断念し、そのまま日本に亡命（政治難民となる）し、1984年4月まで、協会の嘱託としてお世話になりました。その間、日本青年海外協力隊事務局と外務省研修所でラオス語とフランス語講師をするかたわら、日本の国籍法改正運動に参加・協力し、インドシナ3国（ラオス、カンボジア、ベトナム）難民救援運動等に努力し、主に①難民を助ける会（AAR）設立参加発起人、②アジア連帯委員会（CSA）設立参加発起人（常任理事）、③モラロジー国際救援運動推進委員会（MIRC）の設立呼びかけ、④在日ラオス協会設立（会長）に努めました。

また、1985年の夏に、日本の外務省と日本アフリカ協会の派遣でセネガル、アイボリーコースト（コートジュボアール）、マリ、ニジェール、エチオピア、ジブチの6か国とフランス、英国を訪れ、同年には、タイ北部チェンライ県での恵まれない少数民族の救援活動をするために、現地タイ人のピパット・チャイスリン氏と聖学院高等学校教員および麗澤大学教員とともに「メーコックファーム・プロジェクト」の設立発起人会を設置しました。その後、1992年にMIRCの支援によって、同プロジェクトのインターナショナルハウスを建設しました。現在、同プロジェクトで6年前からボランティアをしている麗澤大学卒業生1人の現地生活助成金は、麗澤海外開発協会から協力していただいています。

以上のように、麗澤海外開発協会は、ラオスから始まり、コスタリカ、タイ、ネパールなど発展途上国国民の生活向上のための援助に努力してきました。1971年、この協会のスタートにあたって、廣池千太郎先生は「発展途上国同朋の向上に尽力することを決意したが、それは人類愛の精神を体得した人々の献身的努力によってのみ可能であること確信しております」と述べておられます。ラオス、コスタリカ、タイ、ネパールでの試みは、東南アジア諸国などの真の復興に対する麗澤精神の具体的な表れと言えましょう。これからは、関係を結んできた発展途上国の経済開発援助のみならず、国民の精神開発（Common Morality and Supreme Morality）の教育にも力を入れなければならない時期になったと思います。同時に、麗澤大学の卒業生やモラロジー関係の青年の発展途上国への協力、ボランティア、交流への支援も、モラロジーの国際化時代にふさわしい具体的な活動になると思います。

＜2003年1月記＞　（麗澤海外開発協会理事・麗澤大学外国語学部教授）

派遣スタッフの思い出

かけがえのない体験

山口　明

桑の剪定をする山口氏

■ 骨をうずめる覚悟で……

私が役に立てるなら派遣先は世界のどこでもよかった。骨をうずめるつもりで働き、時の流れで帰国したが、生きていく上であまりバタバタしなくなったのは、駐在体験があったからだと思います。何よりも生涯の友ができた。また、一国の体制が変わっていくというその様をこの目で実際に見たことは、戦争体験を持たない私には、かけがえのない学びとなりました。

■ 温かい人間関係を教えられた

王制の国で、まるで平安時代にタイムスリップしたようにおだやかで、おっとりした人々の生活でした。日本から見れば物質的には貧しく見えましたが、人々の心のネットワーク、いたわり合う様子に、真の温かい人間関係を教えられたように思います。

ラオス派遣スタッフ。左が山口氏

■ 今井氏が解放軍に捕まる

国の体制が変わるとき、ガソリン、食品、日用品などがすっかりなくなり、車はただの鉄のかたまりで役立たずでした。仕方がないので自転車を買い、片道25ｋｍの農場通いをしたことは忘れられません。でも、道が整備されていないので、その自転車もすぐに壊れてしまいました。そのために私は帰宅が遅れ、夜間の外出禁止時間に間に合わなかったのでした。そんな私を今井氏が捜しに外へ出たのですが、逆に解放軍に捕まり、留置所に放り込まれてしまいました。今井氏はラオス語が上手なので、どうも現地人と間違われたようだったのです。日本人と分かり釈放されましたが、それまで本当に心配しました。

日本ではできない体験を

今井　収

私たちの住んでいた部屋の中に、ネズミの穴が３個ありました。夜はランプの生活でしたが、夜８時ごろ、ネズミが出たり入ったりして大変平和な部屋でした。仕事が終わって車で遊んで帰る途中、大木を踏んだので何かなと思ったらニシキヘビだったなんてこともありました。何回も踏んで車に積んで持っていき、ラオス人に差し上げたら喜んで、鍋に入れて煮て食べました。私も一緒に食べましたが、やわらかい肉でおいしかったですよ。日本ではなかなかできないことを、たくさん体験させていただきました。

ランプ生活の中での今井氏（右）と青木氏（左）

再び訪れたいラオス

池田　信輔

● 海外送金も自由にできなかった時代

近年の日本社会では、ライフラインといわれる電気・ガス・水道・電話などが数時間停止すると大きな社会問題になりますが、当時のラオスでは社会問題になることが全くありませんでした。それでも、特別に不自由は感じませんでした。

当時はまだ、協会が組織化されていませんでしたし、日本政府は外貨不足で海外送金が自由化されていませんでしたので、目的が技術協力とはいいましても、資機材調達の費用もままならない状態でした。そんな状態でしたので、計画が思うように進まず、大変苦労いたしました。それでも現地で４年間勤めることができたのは、有志の方々のご援助のおかげと感謝いたしております。

農場果樹園マンゴーの木の下に立つ池田氏（1968年）

● またお手伝いできれば是非！

ラオスに関わって10年余り、帰国して20年を過ごしてみて、

もう一度東南アジアにと思い、シニア海外ボランティアの制度があることを知り、1998年に応募しました。当時、まだラオスからの要請はなく、隣国タイの養蚕研究所に勤務して3年目になります。ラオスには数回、短期旅行をしてみましたが、できればもう一度、体力のあるうちにお手伝いができる機会があれば再び行ってみたい。そんなことを思い起こさせるのが、ラオスという国です。

16年ぶりのラオス訪問

青木　丈幸

1993年正月、財団法人麗澤海外開発協会の一員（1970～1977年）として過ごした我が青春の地ラオスを訪ねる機会を得て、共同農場経営者であったカンバイ家の人たちの昔と変わらぬ温かな心にふれた一時と、現代版浦島太郎の2泊3日を過ごした。

私は、16年ぶりに首都ビエンチャンのワッタイ空港に降り立ったとき、遠い昔に歩き疲れてやっと我が家にたどり着いたときに感じたものと同じ感覚を味わった。そして懐かしの町並みの一つひとつを確かめるように、一路カンバイ家へと急いだ。そこで私を待っていたものは、家族の矢継ぎ早の歓迎あいさつだった。

青木氏（右）と農場の仲間たち

「よく来てくれた。一人で来たのか。仲間たちは皆変わりなく元気でやっているか。おかみ（カンバイ夫人）は、フランスへ亡命した娘や親戚の者たちに会いに行ったまま半年も家を留守にしているが、まあ昔のように自分の家だと思ってくつろいでよ」

時代は変わっても、時の流れを超えて昔のままの口調と、心で迎えてくれた。ああ、何とありがたいことか。

とにかく、まずはカンバイ氏の墓参りをと、中庭に建てられた立派な胸像付きの墓前に、さっそくお花とローソクをお

供えし、諸々の報告をさせていただき、第一目的達成。まずは一安心。

次に第二の目的であった農場（北西へ25キロ）へ。道すがら当時の倍に拡幅された完全舗装の道路には電線がどこまでも伸び、家々にはテレビのアンテナが立っている。もちろん、ガソリンスタンドも目立つ。私がいた当時は、乗合いタクシーなどでも、ガス欠にでもなれば、町までガソリンを買いに行っている間は木陰で１～２時間待つことが常識だったので、全く隔世の感がある。ランプの芯やローソクを買いに行った店も、今や高級ウィスキーが並べられている。その一方で「アメリカに亡命した娘が結婚し、送金してくれたお陰で、この車を買ったんだ」と自慢気に話すのを聞き、驚いたり喜んだり。やっと着いた農場では、桑畑が一面の草原に大変身。よくも変わったものだ。当時の面影は全くなかった。

カンバイ氏の長男（左から２番目）の表敬訪問（1982年、廣池千太郎会長を囲んで）

1987年から始まった個人経営の自由化、外国企業との合併など、開放政策によって西側諸国との関係が年々強化されてきている。当時、大きな日傘をいくつも広げただけの朝市が立っていた場所も、立派な建物の中にショッピングセンターとなり、扱われている商品も豊富な家電製品、衣料品等、まさに百貨店。日本政府の援助でバス路線も整備されていた。

また、1992年８月には革命後初めて憲法が制定され、経済システムも自給自足経済から市場経済への移行が規程され、海外在住のラオス人の帰国と保障も盛り込まれた。近い将来、もっと民主化が進めば、きっと海外に亡命した人たちも祖国再建のために帰国することだろう。

1994年の完成予定でメコン河にも橋がかかるとか。その工事現場を見ながら渡し場タドゥアからノンカイ（タイ）へ向かう舟の上、頬をなでるメコンの涼風に、カンバイ家の人たち、ラオスの人々の前途が、太陽を受けてきらきらと輝くこの悠久のメコンの流れのごとくあれ、と祈りながら……合掌。

（1993年記）